

英 米 語 用 法 辭 典

井 上 義 昌 編

英米語用法辞典

井上義昌編

東京

開拓社

**A Dictionary of
English and American Usage**

英米語用法辞典

昭和35年12月15日	第1版発行
昭和39年3月25日	第5版発行
昭和43年1月20日	第10版発行
昭和48年7月1日	第15版発行
昭和56年4月15日	第20版発行
昭和59年7月20日	第21版発行 ©

編者	井上義昌
発行者	株式会社開拓社 代表者 長沼國男
印刷者	日之出印刷株式会社

発行所	郵便番号 101 東京都千代田区神田神保町2の5 株式会社開拓社 電話 東京(03) 265-7641(代表) 振替口座 東京 6-39587番
-----	--

3582-1108-0905

定価5500円

は し が き

われわれが日常日本語で書かれた書物や新聞雑誌などを読む場合文法や用法上の疑問を起こすことはきわめて少ない。また変わった表現があれば、これは普通の表現でないとか、誤りであるとか、すぐに直観できる場合が多い。しかるに英文を読んだり書いたりする場合、初級程度のものは別としても、語法上のいろいろな疑問が起こる。ことに英語教壇に立って学生や生徒を指導する場合このことを痛感する。どうしてこのような違いを生ずるのであるのか。幼時から自然に習得した日本語はほんとうに自分のものとなっているが、英語の場合は、特別の環境で母国語を習得した人たちは別として、程度の差はあっても不自然な学習方法をとらざるを得ないので、ほんとうに英語がわかっていないからであるといつてよからう。これは英米その他の外国人が日本語を習う場合も同様である。日本語の「は」と「が」などについて、われわれは文法的にあらゆる場合を説明することはむずかしいが、実際にこれを使用する場合迷うことはほとんどない。しかるに外国人が日本語を学ぶ場合はこの2つの区別は非常にむずかしいので、かつて「日本語における「は」と「が」の研究」というような参考書が外国で刊行されたことがあるとも聞いている。

これと同じように英米人にはなんら疑問とならないことも、われわれ日本人には疑問となることがきわめて多い。もちろん英米人でも自国語の語法を語学として厳密に学ぶ場合にはいろいろの疑問を起こすことは、English [and Grammar] Usage; [American-] English Usage などの標題の辞書や参考書が続々と刊行されているのを見てもわかる。しかし英米語を母国語とする人たちの起こす疑問と、英語を外国語として学ぶわれわれ日本人の起こす疑問との間にはかなりの食い違いがあることが多い。いわば両者の疑問は次元 (dimension) を異にするといつてもよい。

〔この2語の区別については古くは有名な日本学者 B. H. Cham-

berlain [*Handbook of Colloquial Japanese* (1886)], コロンビア大学の H. G. Henderson [*Handbook of Japanese Grammar* (1945)] なども言及しているが、長沼直兄氏が外国人のために書かれた *First Lessons in Japanese* には次のように説明してある—「が」は文の主語を強調し、「は」は述語を強調する。「これが本です」は「どれが本ですか」に対する答えであり、「これ」を強調するが、「これは本です」は「これは何ですか」に対する答えであって、「本」を強調する。なお否定文では否定の部分が強調されるので、普通「は」を用いる]

このようなわけで英米の学者によって書かれた辞書や参考書は有益な点が多いことはいうまでもないが、他方なんとなく物足らなさを感じる場合が少なくない。その上ある語法については学者の意見が一致しない場合がある。われわれがある表現や語句について疑問を起し、英米の辞書や参考書を調べて著名な学者の解説を見て、一応なるほどと納得しても、他方にまったく反対と思われる有力な説があることを知って、ふたたび迷うというようなことがよくある。これらの場合一方の説が正しく、他方が誤りであるとは必ずしも断言できない。英国では誤りとされている語法でも、米国ではきわめて普通に用いているというようなこともある。また同じ英国、あるいは米国の学者であっても、その見解の立場の相違から意見がわかれる場合もあるからである。

とにかくわれわれの困ることは学者間にいろいろ異説があって一方的な説明だけでは安心できない場合が往々あるということである。こういう不安を除くためには、諸学者の説をなるべく多く集成、比較してみるよりほかないと思う。そして英米その他諸外国（ことにドイツ、オランダ、デンマーク、スウェーデン、ノルウェーなど）の学者ばかりでなく、日本の学者の説も大いに参考となる。それは日本人が疑問を起しやすく、また誤りに陥りがちな語法に解説の重点が置かれていることが多いからである。

このような見地から本辞典は内外諸学者の説を約 32 万字に集大成して英語の研究者、ことに教壇に立つ方々の背景的知識として役

だつようにとの意図をもって編集したものである。しかしその内容のほとんどすべては内外先覚の学恩によるもので、編者自身がなんらかの貢献をしたとすれば、これら諸家に負う資料を辞書ふうにある程度排列体系化したこと以外にはほとんど何もないであろう。今ここにできあがったものを見ると、やはり意に満たない点がきわめて多く、今すぐにも増訂に着手したいような気持ちである。なにぶん浅学非才の編者のことであるから思わぬ誤解や誤記がないともかぎらない。今後本書を利用していただく方々のご教示によって誤記誤植とともに不備欠陥をおいおいと修正して少しでもすぐれたものにしたいと思う。

終わりにのぞみ本辞典の解説や例文の資料を仰いだ別記文献の編著者の絶大な学恩、並びにこれらの資料となった数多くの書物や雑誌からの引用を許していただいた研究社・大修館・泰文堂・篠崎書林などのご好意に対して深く感謝の意を表す。なお学兄西森善広・青木茂の両氏にはめんどろな校正の仕事を引き受けていただいた同時にいろいろ有益なご指導を賜わったこと、富田和夫君をはじめ多年にわたり編集用カードの整理をしてくださった方々のご親切、また開拓社が本辞典のために多大の犠牲を払われたこと並びに一年あまりにわたって、5校にもおよぶ校正について日之出印刷株式会社各位が組版において示された忍耐と献身的なご努力に対して、心から厚くお礼を申し上げる次第である。

昭和 35 年 10 月

井 上 義 昌

編 集 の 方 針

1 本書は一見してわかるとおり英語の用法および文法に関する事項について内外の諸学者がその著書や雑誌などに発表された解説や意見の精髓を総合集成したものであるが、また直接指導を仰いで記したものもあり、したがってまた世に発表されていない解説もある。これらの解説は広く内外の参考書をあさって煩をいとわず多くのものをあげるに努めた。

2 本辞典に収録した項目についてはかなり詳しく述べたつもりであるが、その資料はほとんど限りがないといってもよく、別記引用参考の文献だけでも、その内容のあらましを紹介すれば本辞典の内容の数倍のものとなるであろう。項目の数が十分でないことは編者自身も認めている。幸いにして他日よき機会があれば、大増補をするか、または本辞典の続編ともいべきものをまとめてこの欠陥を補いたいと思っている。

3 既刊「英語類語辞典」の解説について「あまり説明がくどすぎるものがある」との批評も受けたことがあるが、別の角度から見た同じ意味の説明を繰り返す読むとはほんとうにわかったような感じを受けるという利点もあるので、本辞典も同じ方針で編集した。なお英語類語辞典の〔注意〕、〔参考〕などの解説は用法・文法に関するものが多いので、そのほとんど全部は本辞典に収録した。利用される方々が一々両辞典を参照される手数を省くためである。ただし各項目について程度の差はあるが本辞典のほうが説明が詳しくなっている。

4 本書に収録した見出し語の選択についてはあくまで日本人本位とし、英米発行の用法辞典や参考書にあげられていても日本人にはほとんど解説の必要を認めないものなるべく省きこれと反対にわが国の学習者にとっては混同しやすく、しかも欧米の参考書に通例見あたらないもの、例えば drink と drink of; eat と eat of; English と of England, England's の区別やその他一般の参考書には見あたらないで、しかも日本人にはわかりにくいような事項については重点的に解説するように努めた。

5 われわれが語学の参考書を読むとき、その出典があればこれを知りたいと思うことがしばしばある。この点にかんがみ本書ではできるだけそのよりどころをカッコ《 》、〔 〕内に示し、また解説中の主要な語には原語の注を加えて original works の解説を直接見るような感じを与え、これによって語句の真意義が理解されるように努めた。

6 日本語の解説は原則として原文のままをとることにしたが、全組織の統一上やむを得ずもの意味を失わないかぎり、時には文体を改め、前後または中間を省略し、あるいは日本語の送りがないかなづかいなどを改めなどしたものも少なくない。これがためにもし諸大家の金玉の文字をそこなうようなことがあったかもしれないが、文責はもちろんすべて編者にある。

7 本文の足りないところを補いまたは参考に資するために〔注意〕、〔参考〕、〔注解〕などを随所に挿入したが、これらは英語学習者が誤りやすく、しかも一般の文法書や参考書にはあまりしるされていない微細な法則を示すに努めた。なお従来学者間に異論のあったものなどについては、特に詳細に述べる方針をとった。しかしまれにしか出会わないような例外的用法は概

して一般学習者にとってはあまり必要でないから、これらを強調しすぎるというゆるい 'hairsplitting' (つまらない細かな区別立て) や "One cannot see the wood for the trees." (木を見て林を見ず) の弊に陥るおそれもあるから注意を要する。

8 本辞典の例文は主として勝俣鈴吉郎・新英和活用大辞典；入江祝衛・英作文辞典；斎藤秀三郎・熟語本位中辞典；Kirkpatrick (Edinburgh 大学教授), *Handbook of Idiomatic English*；W. McMordie, *English Idioms and How to Use Them* (Revised by R.C. Goffin) を初めとして、そのほか内外の著名な辞典や文法・用法の参考書から引用したものが多い。とにかく自作の英文は例としてあまりの方針をとった。

9 見出し語のあげ方についてはすべての語句を個々に離して alphabet 順に並べれば「索引」の必要もなくなって便利ではあるが、類語・類句や類似の用法の比較ということも大切であるから、便宜上このほかにかなりの重点を置くこととした。また「凡例」3に示すように→⇒の符号や「...を参照」などを随所に入れることによって、いわゆる cross reference (前後参照) に意を用い、解説がなるべく network になるように努めた。

10 本辞典はその名が示すように英・和語の用法に重点が置いてあるので、文法事項についてはその解説が断片的なものとならざるを得なかったが、今編集準備中の「詳解英文法辞典」では文法を組織的に扱ってみたいと思う。本辞典の解説項目中若干のもの〔現在完了 (Have+P.P.)、過去完了 (Had+P.P.)、冠詞 (The)、Shall, will など〕はその見本ともする意味でかなり詳しくかつ系統的に述べてある。

11 索引は解説内容を十分に表わすように作成した。ことに見出しにくいと思われる語句については二重三重に索引をつくり、容易に所要の語を求めることができるようにしてある。例えば strike (hit, pat, etc.) a person on the ~ の句については、strike のほかに hit や pat の語からもこの句をひくことができ、また take (catch, get) cold の句では take, catch, get のほか cold からひけるようにしてある。

12 本辞典のかなづかいは だいたい昭和33 (1958) 年11月18日の国語審議会建議による「現代かなづかい」により、漢字についてもなるべく「当用漢字」を用いるのを方針としたが、スペースなどの関係で多少の例外 (「例えば」、「比喩的」、我々、一層 など) もあり、伸縮性をもたせておいた。

凡 例

1 引用の語・句・文の原拠である書名または執筆者の名は〔 〕カッコ内に記してある。例えば《ACD》とあれば *The American College Dictionary* によることを示し、《Perrin》とあれば P. G. Perrin の *Writer's Guide and Index to English* によることを示す。また《SD》《WD》のように並べたものは両辞典の主要な解説用語が同一であることを示し、《SD》《WD》のように一方が italic 体となっているものは両辞典の解説の用語は異なるが、結局意味はほとんど同一といってもよいことを示す。また単に《W D》のように italics だけで記したものは意味はほとんど同一であるが、多少意味を補ってある場合などを示す。また《Western; 斎藤静》とあれば A. Western は原著者を、斎藤静は訳者を示す。ただし《Faucett; 牧》のように共著であることを示した場合もある。なお日本語の「同上」を示すには《ib.》と《id.》とを用いたが、前者の ib. (= ibidem = in the same place) は辞典その他の書名をさす場合に用い、id. (= idem = the same) は同一著者によることを示している。

2 英文中のある語を省略してもよいことを示す場合は〔 〕カッコを用い、注釈を示すには()カッコを用いるのを大体の原則とした。例えば[on] this day; 一般的(general)などのようである。また比較的簡単な注釈は解説の終わりに〔 〕カッコ内に入れてある。また()は()内の語句が、その直前の語句と代わり用いてもよいことを示す場合もある。すなわち ~ (or ~) の or を省いてある場合がある。

3 本辞典独特の符号としては次のようなものがある。

// — 解説の文中に // 印のあるものは、そこで筆者の改まっていることを示す。

* * * — * 印は(主として)高校教科書からの引用, ** 印は入学試験問題からの引用であることを示す。また【* ……】のようにカッコ内に * 印があるものは編者の加えた「注釈」であることを示す。

→ ⇒ — 最初の → 印は単に「参照されたし」の意味を示し、⇒ 印は「ぜひ参照されたし」の意味で用いてある。指示するところに詳しい解説がある場合に用いてある。

4 本辞典で用いてある略語には次のようなものがある。〔常識となっているもの、例えば 図
代 府 國 勸 勵 館 園 圃 園 自 他 々 々 などについては説明を省く〕

㊦ ㊦—㊦ は countable noun (数えられる名詞) [可算語], ㊦ は uncountable (数えられない名詞) [不可算語] を示す。これは Jespersen [*Philosophy of Grammar* p. 188] の用語であるが, Palmer や Hornby [ISD] にも用いてある。英和辞典では三省堂の明解英和辞典(新訂版)がこの方式で語の性質を明らかにしている。通例普通名詞は ㊦ であり, 物質名詞や抽象名詞は ㊦ である。しかし同じ1つの単語でも ㊦ ともあり ㊦ ともあるものも多い。例えば order という語は「順序」、「秩序」の意味では ㊦ であるが「命令」、「注文」、「かわせ」、「階級」、「勲章」などの意味では ㊦ と

なる。ただしすべての語の意味がこのどちらにはっきりと区別できるとはいわれない。〔詳しくは上記の明解英和辞典の「本書の使い方」を参照〕

Amer.=American 米語(国)の。

Bk.=Book 巻, 編。

cf.=confer (=compare) 比較(参照)せよ。

e. g.=exempli gratia (=for example) 例えば。

Eng.=English 英語。

esp.=especially 特に。

etc.=et cetera (=and so forth) ...など。

f.=and the following [page] および次のページ。

ff.=and the following [pages] および次のページ。(複数)

fn.=foot-note 脚注。

Gram.=Grammar 文法。

i. e.=id est (=that is) すなわち。

ME=Middle English 中世英語。

Mod.=Modern 近代の。

ModE=Modern English 近代英語。

No.=Number ...号。

OE=Old English 古代英語。

op. cit.=opus citatum (=in the work cited) 前掲(引用)書。

p.=page ページ。

PE=Present-day English 現代英語。

pp.=pages ページ。(複数)

Pt.=Part ...部。

sic=so, thus 原文のまま。

Suppl.=Supplement 補遺。

s. v.=sub verbo (= under the word) ...の語の下に, ...の語を見よ。

Vol.=Volume ...巻。

引用・参考文献〔（ ）内は略称，敬称略〕

- 〔ACD〕= *The American College Dictionary* (New York)
- 〔AEU〕= M. Nicholson, *A Dictionary of American-English Usage* (New York)
- 〔Allen〕= W.S. Allen, *Living English Structure* (London, New York)
- 〔Baker〕= J.T. Baker, *Correct English* (New York)
- 〔Brackenbury〕= G. Brackenbury, *Studies in English Idioms* (London)
- 〔Bradley〕= H. Bradley, *The Making of English* (London)
- 〔Carey〕= G. V. Carey, *American into English* (Melbourne, London, Toronto)
- 〔CAU〕= Bergen Evans; Cornellia Evans, *A Dictionary of Contemporary American Usage* (New York)
- 〔CD〕= *The Century Dictionary* (New York)
- 〔Christophersen〕= P. Christophersen, *The Articles* (Copenhagen, London)
- 〔COD〕= *The Concise Oxford Dictionary* (Oxford)
- 〔Collins〕= *The Choice of Words* (London)
- 〔Crabb〕= G. Crabb, *Dictionary of English Synonyms* (London)
- 〔Curme〕= G. O. Curme, *A Grammar of the English Language (Parts of Speech and Accidence (Syntax))* (New York); *English Grammar* (New York)
- 〔DCA〕= Shizuka Saito, *A Dictionary of Current American*〔米語辞典〕(三省堂)
- 〔Evans〕= Bergen Evans; Cornellia Evans, *A Dictionary of Contemporary American Usage* (New York)
- 〔ES〕= *English Studies* (Holland)〔オランダ発行の英語雑誌〕
- 〔Faucett; 牧〕= *Complete Pocket Guide to Standard English*〔標準英語文法作文辞典〕(篠崎書林)
- 〔Fowler〕= H. W. Fowler, *A Modern English Usage* (Oxford)
- 〔Fries〕= C. A. Fries, *American English Grammar* (New York)
- 〔GD〕= Weseen, *Crowell's Dictionary of English Grammar and Handbook of American Usage* (New York)
- 〔Günther〕= J. H. A. Günther, *English Synonyms and Homonyms* (The Hague)

- 《Hodges》= J. C. Hodges, *Harbrace Handbook of English* (New York, Chicago)
- 《Hook; Mathews》= J. N. Hook; E. G. Mathews, *Modern American Grammar and Usage* (New York)
- 《Hornby》= A. S. Hornby, *A Guide to Patterns and Usage in English* (with Notes by T. Iwasaki) (研究社); *Idiomatic and Syntactic English Dictionary* (開拓社)
- 《Hornby; 石川》= *A Beginners' English-Japanese Dictionary* [英語学習辞典] (開拓社)
- 《Horwill》= H. W. Horwill, *A Dictionary of Modern American Usage* (Oxford)
- 《Hugon》= P. D. Hugon, *The Minerva Word Finder* (London)
- 《ISD》= *Idiomatic and Syntactic English Dictionary* (Tokyo)
- 《Jespersen》= O. Jespersen, *A Modern English Grammar* (Heidelberg, Copenhagen, London); *Philosophy of Grammar* (London); *Essentials of English Grammar* (London)
- 《Krapp》= G. P. Krapp, *A Comprehensive Guide to Good English* (New York)
- 《Kron; Russel》= R. Kron and R. J. Russel, *Slang and Colloquial English* (Leipzig)
- 《Krüger》= G. Krüger, *Synonymik und Wortgebrauch der englischen Sprache* (Berlin u. Bonn), *Englische Synonymik* (Mittlere Ausgabe) (Berlin u. Bonn)
- 《Kruisinga》= E. Kruisinga, *A Handbook of Present-day English* (Utrecht)
- 《Kirkpatrick》= J. Kirkpatrick, *Handbook of Idiomatic English* (Heidelberg)
- 《MAU》= H. W. Horwill, *A Dictionary of Modern American Usage* (Oxford)
- 《McMordie》= W. McMordie; R. C. Goffin, *English Idioms and How to Use Them* (London, Tokyo)
- 《MEG》= O. Jespersen, *A Modern English Grammar* (Heidelberg, Copenhagen, London)
- 《Mencken》= *The American Language* (New York)
- 《MEU》= H. W. Fowler, *A Modern English Usage* (Oxford)

- (NCD) = *The New Century Dictionary* (New York)
- (NEG) = Henry Sweet, *A New English Grammar* (London)
- (Nicholson) = M. Nicholson, *A Dictionary of American-English Usage* (New York)
- (OED) = *The Oxford English Dictionary* (= *A New English Dictionary*) (Oxford)
- (Ogden) = C. K. Ogden, *The Basic Dictionary* (London)
- (Onions) = C. T. Onions, *An Advanced English Syntax* (London)
- (Palmer) = H. E. Palmer, *A Grammar of Spoken English* (Cambridge);
A Grammar of English Words (London)
- (Partridge) = E. Partridge, *The Concise Usage and Abusage* (London);
A Dictionary of Clichés (London); *You Have a Point There* (London); *A Dictionary of Slang and Unconventional English* (London)
- (Perrin) = P. G. Perrin, *Writer's Guide and Index to English* (New York)
- (POD) = *The Pocket Oxford Dictionary* (Oxford, New York)
- (Pooley) = R. C. Pooley, *Teaching English Usage* (New York)
- (Poutsma) = H. Poutsma, *A Grammar of Late Modern English* (Groningen)
- (Rowe; Webb) = F. J. Rowe; W. T. Webb, *A Guide to the Study of English* (London)
- (SD) = *Funk and Wagnall's New Standard Dictionary* (New York)
- (Smith) = C. J. Smith, *Synonyms Discriminated* (London)
- (SOD) = *The Shorter Oxford Dictionary* (Oxford)
- (Stoffel) = C. Stoffel, *Studies in English* (Zutphen)
- (Sweet) = H. Sweet, *A New English Grammar* (London)
- (TBD) = *Thorndike Barnhart Comprehensive Desk Dictionary* (New York)
- (Tipping) = L. Tipping, *A Higher English Grammar* (London)
- (TJF) = T. J. Fitikides, *Common Mistakes in English with Exercises* (London, New York, Toronto)
- (Treble; Vallins) = *A Short Dictionary of English Syntax and Idiom* (Oxford)
- (UED) = H. C. Wyld, *The Universal English Dictionary* (London)

- 《Utter》=R. P. Utter, *Every-Day Words and Their Uses* (New York)
 《Vaccari》=O. Vaccari, *Complete Course of English Conversation Grammar; English Articles and Relative Pronouns* (Tokyo)
 《Vines; Sansom》=Sherard Vines; G. B. Sansom, *A Basic Guide to English Composition* (Tokyo)
 《Vizetelly》=F. H. de Bekker and L. J. de Bekker, *A Desk-Book of Idioms and Idiomatic Phrases in English Speech and Literature* (New York)
 《WCD》=Webster's Collegiate Dictionary (Springfield, U.S.A.)
 《WD》=Webster's New International Dictionary (New York)
 《Weseen》=M. H. Weseen, *Words Confused and Misused* (London)
 《Whitford; Foster》=R. C. Whitford; J. R. Foster, *Concise Dictionary of American Grammar and Usage* (New York)
 《Witherspoon》=A. M. Witherspoon, *Common Errors in English and How to Avoid Them* (New York)
 《WS》=Webster's Dictionary of Synonyms (Springfield, U.S.A.)
 《Zandvoort》=R. W. Zandvoort, *A Handbook of English Grammar* (Groningen, Djakarta)
 《荒木》=荒木一雄・関係詞〔英文法シリーズ 5〕(研究社)
 《Aronstein; 斎藤静》=アメリカ語の研究(篠崎書林)
 《石橋》=石橋幸太郎・英文法とことごと(研究社)
 《市河》=市河三喜・英語学辞典(研究社); 英語学研究と文献(研究社); 英文法研究(研究社); 新英和大辞典(研究社)
 《乾》=乾亮一・分詞・動名詞〔英文法シリーズ 15〕(研究社)
 《岩井》=岩井慶光・助動詞の研究(篠崎書林)
 《岩崎》=岩崎民平・新簡約英和辞典(研究社); 英語の型と正用法〔注釈〕(研究社)
 《植木》=植木五一・動詞上〔現代英文法講座 3〕(研究社); 同 4〔動詞下〕(研究社)
 《Western; 斎藤静》=英文配語の研究(篠崎書林)
 《上本》=上本佐一・語法雑記(研究社); 文法と実際(研究社)
 《上野》=上野景福・語形成〔英文法シリーズ 25〕(研究社); 語学的指導の基礎下〔英語と米語〕(研究社)
 《江川》=江川泰一郎・英文法解説(金子書房); 代名詞〔英文法シリーズ 4〕(研究社); 語学的指導の基礎下〔教室英語の文法〕(研究社)

- 《尾上》=尾上政次・現代米語文法〔現代英文法講座 8〕; アメリカ語法の研究(研究社)
- 《太田》=太田朗・完了形・進行形〔英文法シリーズ 12〕(研究社)
- 《大塚》=大塚高信・新英文法辞典(三省堂); 英文法の知識(三省堂); 英文法論考(研究社); 英文法点描(泰文堂); 英文法小辞典〔共編〕(研究社); 英文法の知識(三省堂)
- 《岡村》=岡村弘・会話英語の表現(研究社)
- 《小川; 上野》=小川芳男; 上野伊栄太・高等英文法(有精堂)
- 《勝俣》=勝俣銓吉郎・新英和活用大辞典(研究社); 新和英大辞典(研究社)
- 《小栗》=小栗敬三・英語発音学(篠崎書林)
- 《Curme; 貴志》=G.O. Curme; 貴志謙二・英文法(原理と実践)(篠崎書林)
- 《金口》=金口儀明・名詞・代名詞〔現代英文法講座 1〕(研究社)
- 《河合》=河合茂・英文法概論(京極書店); 英文法概要(開隆堂)
- 《木原》=木原研三・呼応・話法〔英文法シリーズ 24〕(研究社)
- 《日下部》=日下部徳次・前置詞上〔英文法シリーズ 18〕(研究社)
- 《Christophersen; 一色》=P. Christophersen; 一色マサ子・冠詞(研究社)
- 《小稻》=小稻義男・冠詞・形容詞・副詞〔現代英文法講座 2〕(研究社)
- 《古賀》=古賀頤天・現代英語の正用法下〔現代英文法講座 10〕(研究社)
- 《小西》=小西友七・前置詞下〔英文法シリーズ 19〕(研究社)
- 《五島》=五島忠久・数と性〔英文法シリーズ 7〕(研究社)
- 《小松》=小松房三・口語英語の研究(太陽堂)
- 《斎藤静》=英文法概論(篠崎書林); 米語辞典(三省堂); 明解英文法(篠崎書林); *Sundry Notes on English Grammar* (富山房)
- 《斎藤(秀)》=斎藤秀三郎・新標準英文典(吾妻書房)《斎藤; 松田》=斎藤秀三郎; 松田福松・名詞用法詳解; 代名詞用法詳解; 形容詞用法詳解; 冠詞用法詳解; 動詞構文詳解; 叙法・時制詳解; 助動詞用法詳解; 準動詞用法詳解; 副詞・接続詞用法詳解; 前置詞用法詳解(吾妻書房)
- 《篠田》=篠田治夫・現代英語の正用法上〔現代英文法講座 9〕(研究社)
- 《佐々木》=佐々木達・語学試論集(研究社)
- 《佐々木(高)》=佐々木高政・英文構成法(金子書房)
- 《佐藤》=佐藤佐市・現代アメリカ口語の研究(篠崎書林)
- 《沢崎》=沢崎九二三・文(上)〔英文法シリーズ 20〕(研究社); 英文法研究(山海堂)
- 《空西》=空西哲郎・動詞(種類と語形変化)〔英文法シリーズ 10〕(研究社)
- 《竹原》=竹原常太・スタンダード和英大辞典(宝文館)

- 《竹中》= 竹中治郎・米英語対照辞典（篠崎書林）；米語の輪廓（研究社）；米語の発音と綴字法（研究社）
- 《竜口》= 竜口直太郎・高等英文法解釈（東大社）
- 《田中》= 田中菊雄・英語広文典（白水社）；岩波・英和辞典〔共編〕
- 《豊田》= 豊田実・アメリカ英語とその文体（研究社）
- 《中島》= 中島文雄・英文法辞典（河出書房）；英語学研究室（研究社）；英語・文法と鑑賞（開文社）
- 《中山》= 中山茂・新高等英文文（大学書林）
- 《新津》= 新津米造・新英文法総覧（北星堂）
- 《原沢》= 原沢正喜・現代口語文法〔現代英文法講座 7〕（研究社）
- 《Biard; 厨川》= A. Biard; 厨川文雄・定冠詞論〔英語学ライブラリー〕（研究社）
- 《J. van der Laan; 斎藤静》= 動詞進行形の研究（篠崎書林）
- 《福喜多》= 福喜多靖之助・英吉利語米語の相異（北星堂）
- 《福村》= 福村虎治郎・時制と態〔英文法シリーズ 11〕（研究社）
- 《Bøgholm; 斎藤静》= 前置詞研究法（篠崎書林）
- 《細江》= 細江逸記・英文法汎論〔改訂版〕（泰文堂）；動詞叙法の研究（泰文堂）；動詞時制の研究（泰文堂）；精説英文法汎論（泰文堂）
- 《堀》= 堀英四郎・和文英訳徹底的研究と正しい訳し方（大修館）；初めて学ぶ人の英語会話（大修館）；正しい英語会話（大修館）
- 《榊井》= 榊井迪夫・Shall と Will〔英文法シリーズ 14〕（研究社）
- 《宮内》= 宮内秀雄・法・助動詞〔英文法シリーズ 13〕（研究社）
- 《宮田》= 宮田幸一・「英語教育」（大修館）Question Box の解答
- 《毛利》= 毛利可信・語順〔英文法シリーズ 23〕（研究社）
- 《本橋》= 本橋寿太郎・新英文法（文章論）（千城書房）
- 《八木》= 八木林太郎・副詞・接続詞・間投詞〔英文法シリーズ 17〕（研究社）
- 《山川》= 山川喜久男・文と節〔英文法シリーズ 22〕（研究社）
- 《山崎》= 山崎貞・新自修英文典（研究社）；新英文解釈研究（研究社）
- 《山田；西崎》= 山田巖；西崎一郎・英文法講義（研究社）
- 《吉川》= 吉川美夫・英文法詳説（文建書房）；英文法要説（文建書房）；文（下）〔英文法シリーズ 21〕（研究社）
- 《渡辺(藤)》= 渡辺藤一・前置詞・接続詞・間投詞〔現代英文法講座 5〕（研究社）；資料英語（清水書院）
- 〔雑誌〕= 英語青年（研究社）〔主として第 80 巻から第 100 巻まで〕、英語教育（大修館）〔主として第 3 巻から第 7 巻まで〕；英文法研究（研究社）〔主として第 1 巻から第 2 巻まで〕 *Anglica*（関西大学英語学会）

〔その他のおもな引用人名略称〕

《Blanch》= N. H. Blanch

《Carey》= G. V. Carey

《Clarke》= Edward Clarke

《Johnes》= Trevor Johnes

《Medley》= Austen William Medley

《安藤》= 安藤貞雄

《石川》= 石川林四郎

《伊藤》= 伊藤健三

《岡倉》= 岡倉由三郎

《熊本》= 熊本謙二郎

《相良》= 相良左

《左右田》= 左右田実

《萩原》= 萩原恭平

《村井》= 村井知至

《吉岡》= 吉岡源一郎

《Carey》= Margaret Carey [G. V.

Carey とは別]

《Elder》= Charles Golden Elder

《Lee》= Frank H. Lee

《Vines》= Sherard Vines

《飯島》= 飯島東太郎

《伊地知》= 伊地知純正

《大橋》= 大橋栄三

《喜安》= 喜安瑾太郎

《小島》= 小島嶽

《鈴木》= 鈴木熊太郎

《朱牟田》= 朱牟田夏雄

《宮井》= 宮井安吉

《森》= 森正俊

《渡辺(半)》= 渡辺半次郎